



東京放送局の
ポスター

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 5 8

2008(平成20)年3月22日(土)発行

<1925(大正14)年3月22日、日本でラジオ放送の始まった日・放送記念日>

今から83年前のこの日午前9時半、東京芝浦の高等工芸学校の一室から、「アー、アー、アー、よく聞こえますか。JOAK、JOAK、JOAK、こちらは東京放送局であります」と、初のラジオ放送が流れた。7月には東京港区の愛宕山に放送局を新設。翌年8月には、東京、大阪、名古屋の三放送局が統合されて、日本放送協会が設立された。また、テレビの本放送は戦後の1953(昭和28)年に開始された。



戦時下の中国・上海

原町区本町 門馬政彦

終戦の年の十歳まで上海に

私は一九三五(昭和十)年、中国の上海で生まれ、終戦の昭和二十年、十歳(小学四年生)まで中国にいました。その戦時下の中国での様子を、思い出すまま述べてみます。脈絡のない文をご了承ください。

① “日本兵による暴行”

当時の私が国民学校二年生まで住んでいた上海の閘北区の家の前は、一九三二(昭和七)年の上海事変の時、日本軍の砲爆撃で、かの偉容を誇った上海商務院書館は無残にも瓦礫と化し、鉄筋とコンクリート片を残し、広大な敷地跡には瓦礫と白骨が散乱していた。

日本兵に大変可愛がられた

その鉄筋盗みを見張るため、近くに木造ながら頑丈な兵隊小舎を設け、十数名の日本兵が駐屯していた。私はその兵士に殊の外可愛がられ、よく遊びに行き、軍のトラックで、日本兵に連れられていくつまで、内地も無謀な戦争に徴用され、内地に残った家族や子供達のことを想ってか、良い小父さんであつた。

だが、兵士たちは徒然を紛らわすのに、鉄筋盗みや疑わしい中国人を兵舎前の三本の杭に縛り付け、銃剣を構えて脅すのが日常であった。縛られた彼等は、命乞いをする者、殺されることを諦観している者と様々であった。私は、実際に殺すところを見なかったのは幸いであった。

中国の友達のお父が宙吊りに 私の一言で命が救われる

瓦礫の中で、日本人が食べ残したスイカの白身をむさぼっていた同年配の中国少年と友達になり、スイカをあげたりした。たまたま、彼の父も掴(つか)まり、高い天井から後手に宙吊りにされていた。それを見て、宙吊りの父親のいつ

殺されても構わないという表情と眼差しが今でも忘れられない。私は兵士に、「親子を放してやらなければ、明日から遊びに来ない」と言ったら、解放してくれホッとしたこともありませう。

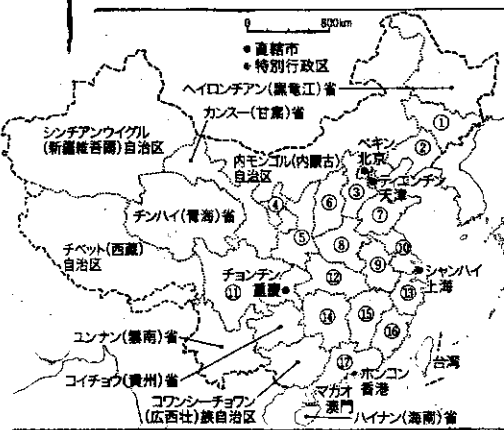
② “上海の空襲”

一九四〇(昭和十五年)年十二月、夜中の砲声で目が覚めた。太平洋戦争が始まり黄浦江(※ホワンプー川・上海の中央を流れる)に繋留されていた米英艦との砲撃戦だった。

一九四三年には、安全のため同じ上海の虹橋路に移住した。当時日本軍は、今の上海虹橋空港に軍の飛行場を建設していた。アメリカの艦載機が拙宅の上を超低空で爆撃に来る日常だった。その時はさほど怖くなかったが、空襲警報下、学校から独りで三キロメートルの道をスクールバスのターミナルまでの空襲は生きた心地がしなかった。

(裏面につづく)

中国の行政区分(省級)



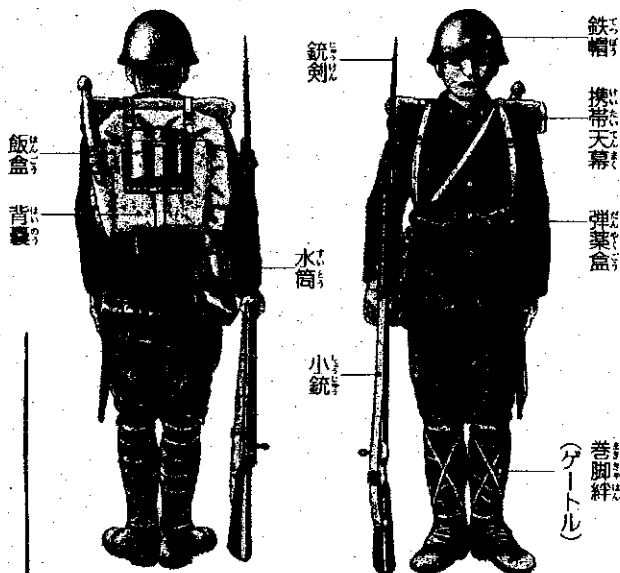
▲現在の上海の賑わい
上海は長江の河口にある、中国最大の商工業都市、貿易港。人口1,300万人。
1932年1月と、1937年8月の「上海事変」で、日本と中国は全面戦争に突入した。

米軍B29の示威的飛行 日本軍の高射砲は届かない

空襲といってもB29が飛来しただけで、日本軍の対空砲火の凄まじい音が恐怖心を煽ったのであった。当時上海には、精銳の海軍特別陸戦隊本部をはじめ、日本軍人十万人、民間人十万人が居た。B29は爆弾を落とすのでもなく、一万メートルの上空からの示威的飛行であった。日本軍の高射砲は届かない。高射砲の破片で何十名かの市民が怪我をした。

「日本軍の敗戦も間もない」と

たまたま撃墜されたB29の残骸を南京路の上海競馬場に誇らしげに展示していた。それに対し中国人は、日本軍の敗戦は間もないと嘲笑していた。



▲陸軍兵士の軍装

(東京書籍『新総合図説国語』より)

③ “日本人街の賑わいと 対米戦への備え”

上海には、日本人の映画館や劇場が数館あった。観に行くに必ず、椅子の下を見るよう放送があった。反日家による時限爆弾が仕掛けられていないかを、確認するためであった。

日曜日には、いわゆる日本人街の呉淞路は、日本人と軍人、中国人で溢れる賑わいだった。日本兵はすれ違う上官に対しては立ち止まって拳手敬礼の習わしがあり、兵卒は数歩歩いては敬礼するので子供供心に気の毒に思えた。

日本兵もまた戦争の被害者

一九四五年になると、我が家の広い庭に、日本兵が塹壕造りに毎日汗を流していた。休憩の時に彼等と話すと、故郷の家族のことに話はずんずんだ。日本兵もまた、無謀な戦争の被害者でもあった。

④ “対中国蔑視教育の 恐ろしさ”

一九四五(昭和二十)年の終戦で、多くの日本人とともに、私も無事引き揚げる事ができた。やがて一九四七年、内山完造氏との縁で日中間航空の第一便で訪中し、以来一九九〇年代からは

度々、幼児期の故郷上海を散策し、旧懐の念を満たしてきた。
私の心の中にも蔑視感が
ある訪中での晩のこと、有名な上海オールドジャズからホテルへの帰途、タクシートの助手席に乗り南京路の綺麗なネオン街をビデオに撮っていた。すると、運転手が怒った口調で車を歩道に寄せ、降りてくれと言わんばかりであった。助手席は原則女性が座る座席だったので、私はその無礼を謝ると親切に送ってくれた。

私はそれにしても、初めて中国人に頭をさげて謝るなんて、何かプライドが悔しかった。私の心身にも中国蔑視感があったのだ。昔の習慣や教育の大切さや恐ろしさを感じた。

日中の平等互惠、友好教育を
昨今、メディア等で中国の恐ろしさが伝えられているが、江南地方の古鎮に行くと、百年一日の如くのおんびりした日常生活や人情に触れられる。素晴らしい水郷の風景や文物、人なつこい住民に接すると、平和のありがたさを感じてみ感じる。

中国も義務教育での反日教育などせず、平等互惠、友好の教育に熱を入れて貰いたい。それが今後のおわだかまりのない日中両国友好になると思う心境です。
(「はらまち九条の会」会員)

他の「九条の会」情報をインターネットでもご覧ください!

- インターネット、「九条の会」や「はらまち九条の会」で検索すると、相双地区をはじめ福島県内や全国の「九条の会」の情報やニュースも簡単に見ることができます。
- 『相馬市九条の会』ニュースも、毎月タブロイド版8ページで発行。内容も大変充実していて読みごたえもあり、私たちもお手本にさせていただいています。ぜひ、ご覧ください。
- この「九条はらまち」も勿論、会発足の創刊号からすべての号が全国や世界に発信されていることになり、毎号誤りのないように大変緊張して編集しています。

